

経釈明文章(五帖第二十一通)

当流の安心というは、なにのようもなくもろもろの雑行雑修のこ
ころをすてて、わが身はいかなる罪業ふかくとも、それをば仏にまか
せまいらせて、ただ一心に阿彌陀如来を、一念にふかくたのみまい
らせて、御たすけ候えと申さん衆生をば、十人は十人百人は
百人ながら、ことごとくたすけたまうべし、これさらに、疑うところつ
ゆぼどもあるべからず、かように信ずる機を安心をよく決定せし
めたる人とはいうなり、このところをこそ、経釈の明文には、
一念發起住正定聚とも平生業成の行人ともいうなり、され
ば、ただ弥陀仏を、一念にふかくたのみたてまつること肝要なり
とこころうべし、このほかには、弥陀如来のわれらをやすくたすけ

まします・御恩ごおんのふかきことをおもいて、行住坐臥ぎょうじゅうざがに・つねに念仏ねんぶつ
を・申とすもべきものなり、

あなかしこ　あなかしこ

経教明文章の大意

浄土真宗の安心は、自力のはからいを捨て、いかに自身の罪が
深くとも、その身をみ仏におまかせし、阿弥陀如来を一心にたの
みたてまつることです。そのようにおたすけくださいとおまかせする衆
生を、十人は十人、百人は百人、ことごとく如来はお救いくださ
います。このことはまったく疑いありません。このように信じるものを、

信心を決定した人というのです。

このことを、經典や論釈の文には、「一念發起住正定聚」とも、「平生業成の行人」ともいわれています。ですから阿弥陀如来を、一心に深くたのみたてまつることが肝要であると心得なければなりません。そして信心を得た後は、み仏が私たちをお救いくださるご恩の深いことを思っ、いついかなるときも念仏すべきです。